



◎砂本貞吉牧師によって聖書と英語の女子塾「広島女学会」として開校。後に女性宣教師 N.B. ゲーンズ氏を校長に迎え「私立英和女学校」となる。1932（昭和7）年に現校名に改称。以来、キリスト教主義教育を土台に国際・人権・平和教育に注力している。

<b>設立</b>	1886(明治19)年
<b>形態</b>	全日制/普通科/女子
<b>生徒数</b>	1学年約220人
<b>2014年度入試合格実績(現浪計)</b>	国公立大は、北海道大、筑波大、京都大、大阪大、神戸大、広島大、山口大、九州大、県立広島大などに87人が合格。私立大は、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、明治大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、広島修道大などに延べ486人が合格。
<b>住所</b>	〒730-0014 広島市中区上鞆町11-32
<b>電話</b>	082-228-4131
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.hjs.ed.jp/">http://www.hjs.ed.jp/</a>

広島県・私立  
**広島女学院中学高校**

**難関大指導とスーパーグローバルハイスクール**

# 難関大対策講座と グローバル教育を機に 生徒の意欲を高める

**変革のステップ**

**背景**

◎全人教育に定評があったが、「生徒の力を伸ばし切れていない」という声が聞かれるように。生徒の中からも難関大に対する期待が感じられた

**実践**

◎東京大・京都大志望者への放課後補習を数学・理科で実施。その後、対象の大学と教科を拡大し難関大対策指導を強化

**成果**

◎東京大・京都大の合格者が出るようになり、志望者も毎年2桁に及ぶ。今後はSGHで掲げたグローバルリーダーの育成を目指す

**京都大現役合格の知らせに  
沸き起こる歓声と拍手**

広島女学院中学高校は、広島市の中心部に位置する私立の中高一貫校だ。キリスト教主義教育を土台に、グローバル教育、人権・平和教育に力を注ぐ。英語の女子塾として創立した歴史を背景に、英語教育に定評があり、海外の大学に進学する生徒は過去20年で約50人以上、国連職員や外交官などグローバル規模で活躍する人材を輩出している。そんな県内有数の伝統校である同校が、2008年、難関大合格者増に向けた改革に着手した。渡辺信一教頭はこう話す。

「通常の授業や部活動、人権・平和教育などで生徒を伸ばしていくのが、本校の伝統です。進学は個人の問題で、学校が組織的に働き掛けるという考えは、それまではあまりありませんでした。一方で、外部から『生徒の学力を伸ばし切れていない』と、厳しい指摘をいただくこともあり、私立校に対する社会の期待が高くなっていると感じていました」

渡辺教頭が今でも忘れられない光景がある。2008年3月、当時進路主任だった渡辺教頭は、中学3年生・高校1年生の集会で次年度の取り組みを説明した。その日は京都大の合格発表の日。久しぶりに同校から現役合格者が出たため、「良いニュースがあります」と公表すると、生徒たちから歓声上がり、拍手が沸き起こった。

「歓声を聞いた瞬間、生徒は難関大に挑戦したいという意欲を潜在的に持っているのだと直感し、そうした意欲に応える取り組みを絶対にやろうと誓いました」（渡辺教頭）

## 難関大補習を始めて1年目で 早くも東京大に2人が合格

08年4月、東京大・京都大志望の3年生を対象とする、初めての放課後補習が始まった。教科は数学と理科で、18時～19時20分に実施した。



広島女学院中学校教頭  
**渡辺 健一** わたなべ けんいち

教職歴30年。同校に赴任して23年目。「目の前の生徒に学ぶ。生徒は本気になれば必ず変わる」



広島女学院中学校高校  
**中村 紀子** なかむら きのこ

教職歴15年。同校に赴任して9年目。進路指導部主任。「意気のあるところに道は開ける。最後のひと押しをしてくれるのは自分のやる気」



広島女学院中学校高校  
**高見 知伸** たかみ ちぶ

教職歴23年。同校に赴任して19年目。グローバル教育推進部「研ぎ澄まされた人権感覚を持ち、世界平和に貢献できる生徒を育てたい」



広島女学院中学校高校  
**安宅 弘展** あたぎ ひろのぶ

教職歴11年。同校に赴任して12年目。グローバル教育推進部「こりあえずやってみる、行ってみる、話してみる。そこから何かが変わっていく」

全人教育を重んじてきた同校にとって、放課後に補習を行うのは容易なことではなかった。

「部活動や課外活動の時間が減るため、補習に異議を唱える先生がいたのは確かです。そこで、補習は生徒の希望を受けて学年会が

実施するのであり、進路指導部はそれを最大限応援するという形で提案し、職員会議での了承を得ることが出来ました」（渡辺教頭）

補習によって個別指導を徹底させたことで、09年度入試では東京大志望者4人のうち2人が合格を勝ち取った。この結果が、指導に当たった教師の自信となったのはもちろん、先輩の躍進を目の当たりにした後輩に「自分たちも合格できるかもしれない」という思いを抱かせた。

そして、10年に新校舎が竣工した際には自習室が設置され、生徒の自学を後押しする環境も整った。3年生での難関大志望者のための放課後補習は恒常的な取り組みとなり、今は「難関大学別対策講座」として、国語・数学・理科・地歴・公民で全12講座が開かれている。14年度は延べ66人の生徒が同講座を受講した。3年生担当が「難関大学別対策講座」を受け持つことで、先を見通した指導が出来るようになったと、進路指導部主任の中村紀子先生は振り返る。

「東京大や京都大の入試問題を分析し、合格に必要な力を教師が再認識できたのは大きかったと思います。普段の授業でも、中学校段階から大学入試を意識した内容を入れるよ

うになりました。大阪大の過去問を解いていた高校3年生が「これ、中3の時に習った考え方を応用すれば解けますよね」と言った時は、積み重ねてきた指導が生徒の中にしっかりと根付いているのだとうれしく感じました」

最難関大を目指す生徒が常にいることも、普通になった。生徒が刺激し合い、向上していく仲間が出来たことで、最後まで諦めない意識も強くなっている。過去6年間で東京大に19人の受験者中4人、京都大に39人中12人が合格した背景には、生徒や教師のそうした変容があった。

## SGHで世界の平和構築に 貢献するリーダーを育成

難関大指導が定着した同校は14年度、文部科学省が指定する「スーパーグローバルハイスクール（SGH）」に選ばれた。中四国・九州圏の私立校では唯一の指定校だ。「ヒロシマ」を継承・発信し、世界の平和構築に貢献するリーダーとなる生徒の育成を目指し、リーダーに必要な3つの力、平和観・対話力・リーダーシップを養うカリキュラム「Peace Studies」に取り組み（P.32図）。取り組みの柱となるのは、①平和教育の授業方法を変え、グローバル人材にふさわしい力を付ける、②国際的に通用する英語力をこれまで以上に育成する、③その2つの力を国内外で活用する機会を設けることだ。

SGHに指定された広島女学院が目指す、グローバル人材像＝  
**「核の惨禍のない世界を創り出すしやかな女性」**  
 「ヒロシマ」を継承・発信し、世界の平和構築に貢献するリーダーとなる生徒を育成。リーダーに必要な3つの力、**平和観・対話力・リーダーシップを養うカリキュラム“Peace Studies”**を実行。

**平和観**

平和を共に創るという視点から、**世界を見る力**。国内外の様々な社会問題に目を向け、深い**探究心**と強い**使命感**を持ったグローバル・リーダーを育成する。

**対話力**

価値観の違う他者と、**コミュニケーションをとる力**。考え方の違う相手を認め、**コミュニケーション**を通じて相手の考えを理解し、自分の考えを発信することが出来るグローバル・リーダーを育成する。

**リーダーシップ**

他者と合意を形成し、**それを実行する力**。集団の中で**主体的**に議論を導き、考えの違う相手ともお互いに納得できる結論を出し、それを実行に移すことが出来る**行動力**を持ったグローバル・リーダーを育成する。

●各学年の総合学習の時間に、“Peace Studies”を行う。**学年ごとに徐々にテーマを世界へ広げ、学びから実践に高める**ことで、生徒の平和観・対話力・リーダーシップを段階的に成長させていく。Peace Studiesとかかわりの深い**海外派遣プログラム**を行うと共に、**海外から本校に中高生を招聘**するフォーラムを開催する。Peace Studiesの時間は、**生徒の主体的な学び**を中心として展開する。教師による一方的な講義形式でなく、生徒が自分でテキストを読み、説明し合い、議論し合う。「正解」のない内外の課題を論理的に考え、自分なりの意見を持ち、それを他者と伝え合いながら具体的な実践に移せるようにする。

学習を通じて、**生徒の世界観・価値観を広げる出会いを提供**する。従来以上に充実した国内外の研修に加え、新たに海外研修（希望者）を立ち上げる予定である。学習の中に、国内外のゲストスピーカーを多数招聘する。

\*学校資料を一部抜粋して編集部が作成。Peace Studiesの具体的な内容は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。<http://berd.benesse.jp> >教育情報>高校向け

参加、海外の方との交流の中で、それまで疑いもなかった『常識』に『なぜ?』を突き付けられ、動揺することがあります。でも、それはある意味、健全なこと。価値観を揺さぶられる経験こそが大切なのです」

生徒が主体的にかかわる授業へのシフトの流れは、教科の授業にも広がっている。安宅先生は、中学2年生の日本史の授業を、現在から過去へとさかのぼって教える形に変えた。現代の世界はどのようなにして出来たのか、10年前、20年前にさかの

**生徒主体の「碑めぐり」で平和の大切さを伝える**

SGH指定校として同校が育成を目指す全ての力を発揮する場の1つが、30年以上続く「碑

ぼって考え、資料を読んで説明したり、生徒同士で議論したりする時間を設けている。授業の雰囲気も変わり、話をただ聞くだけだった生徒が、生き生きと活動に参加しているという。

「以前から受け身な生徒が多いと感じていましたが、それは生徒が能動的に活動できる場を、私が提供していなかったことが原因だと気付きました。私が話し続け、入試に必要な知識を効率良く教えることに終始していた授業では、『次に何を教えてもらえるのか』という待つ姿勢を生み、生徒を受け身にしてきたのだと思います。考える時間、自由に意見を言える場をつくれれば、生徒は自ら動き出すのだとつくづく実感しました」（安宅先生）

国際的に通用する英語力は、豊富なインプットとアウトプットの機会を設けている授業に加え、選択制のハイレベル講座や苦手分野克服のための放課後勉強会など、習熟度に合わせた丁寧な指導で育成する。その結果、中学3年生と高校1年生の全員が受検しているベネッセのGTEC for STUDENTSでは、高校1年生が平均点500点以上という好成績を取っている。

平和教育については、被爆都市ヒロシマの高校として長年にわたる実績があり、SGH指定を機に、生徒がより主体的にかかわる授業にした。一斉授業から、生徒たちのディスカッションや発表によって進める形に変えた。地歴・公民科の安宅弘展先生は、その意図をこう話す。

「従来の答えを教える指導からの脱却を意識しました。グローバル社会が直面している課題に正解はありません。平和とは何か、そ

のために何をすべきか、生徒同士が議論し、彼女たちなりに答えを探し出せるように後押しし、主体的に課題解決に向かう力を身に付けさせたいと考えています」

多様な考え方に触れる中で、自分の持つ価値観が揺らぐ生徒もいる。グローバル教育推進部の高見知伸先生は次のように語る。

「核兵器保有に絶対反対という生徒でも、

のたが、それは生徒が能動的に活動できる場を、私が提供していなかったことが原因だと気付きました。私が話し続け、入試に必要な知識を効率良く教えることに終始していた授業では、『次に何を教えてもらえるのか』という待つ姿勢を生み、生徒を受け身にしてきたのだと思います。考える時間、自由に意見を言える場をつくれれば、生徒は自ら動き出すのだとつくづく実感しました」（安宅先生）

めぐり」だ。同校には、キリスト教同盟校や教育関係者、政府関係者など、毎年国内外から100〜150人が訪問する。案内や交流会などは生徒が中心に進め、必要に応じて平和記念公園の碑を案内する「碑めぐり」を行う。訪問者対応は希望制だが、毎回20〜30人の生徒が応募し、参加数は年間延べ100人以上となる。

「碑に書かれた内容を語るだけでは不十分で、生徒は自分で調べた内容や、被爆者に直接聞いた話を織り交ぜながら、原稿を読まずにお客様を案内します。海外からのお客様には、もちろん英語で対応します。プレゼンテーション能力やコミュニケーション力などを磨くと共に、自ら考え、責任を持ってやり遂げることで、リーダーに必要な資質を養える場にもなっています」(高見先生)

以前は生徒が用意した原稿を教師が全て確認していたが、3年前から、高校2・3年生からリーダーを選抜し、後輩の指導を任せるようにした。リーダーが後輩の原稿をチェックし、リハールを行った上で当日に臨む。

SGHで育んだ力を海外で発揮する場としては、生徒の海外派遣の機会を増やす。現在のアメリカ・オーストラリアへの短期留学に加え、14年度から中学2年生や高校1年生ではカンボジアや韓国への研修旅行を行う。これまでは語学研修が中心だったが、SGHでは平和教育の要素を取り入れ、現地の同世代の学生と平和に

ついで語り合い、核兵器不拡散条約再検討会議といった国際会議では生徒が発表する予定だ。

## 平和・人権教育における 中高の連動性を高める

今後の課題は大きく分けて2つある。1つは、成績上位層が持つ志望実現に向かって切磋琢磨する雰囲気、学級全体に広げることだ。

「本校の生徒は志望を表に出したくないという意識が強く、そこを打破することが今後の目標です。自由に夢や志望を語り合える場、安心して語り合える雰囲気をつくることは、最後まで諦めない粘り強さを育む上でも大切

です。自分の言動に責任を持つことにもつながると期待しています」(中村先生)

2つめの課題は、SGHにおける中学校と高校の連動だ。難関大合格者増を目指す改革の過程で高校の教育課程を変更し、7時限目を設けた。学力は底上げされたが、放課後の時間が減り、中学校と連動した課外活動が少なくなった。

「高校の先輩が海外からのお客様と英語で話す場面を見れば、今、学んでいる英語がどう役立つのかが分かり、中学生の学習意欲も高まるでしょう。今後は6年一貫教育の利点を生かして中高の連動性を高め、学力だけでなく主体性や国際性の面でも早期からの育成を図っていききたいと思います」(渡辺教頭)

## 情熱 若手教師が語る、指導変革への

### 生徒に動かされて 教師も学校も成長する

グローバル教育推進部 安宅弘展

本校に赴任して11年の間にいくつかの転機がありました。1つは、2008年に難関大の合格者増の方針が打ち出された時です。当時、私は3年生の担任で、他教科や他学年の先生方からの協力をいただいて、放課後補習を実現させることが出来ました。それまで目の前の生徒だけしか見ていなかった私が、初めて、組織の中にある自分を意識するきっかけになりました。

もう1つは13年度、SGHへの申請や構想内容の立案を行う検討委員会の委員長を任された時です。プロジェクトチームを組織し、先生方からご意見をいただきながら、A4用紙50枚分の申請書を作成・提出した結果、文部科学省から指定を受けることが出来たのは、大きな自信になりました。

いずれも学校の指導の方向性を決める局面で、活躍の場を与えられたのは幸運だったと思います。ただ、最近つくづく感じるのは、学校を前に進ませているのは、教師ではなく生徒だということです。難関大学別対策講座が実現したのも、東京大に行きたいという生徒の声があったからであり、SGHに指定されたのも、海外で頑張っている卒業生や平和のための活動に取り組んできた生徒たちがいたからです。生徒の思いが私たち教師を動かし、学校の文化や制度を変える力になりました。これからも生徒たちが生き生きと活躍できる場を提供し、本校でしか出来ない改革、人づくりを追求していきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2014年8月号指導変革の軌跡「長野県上田高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け